

論文

## 幼児教育における文字指導に関する一考察 ～芸術・表現的観点からみる文字の在り方をめぐって～

二子石諒太、八谷 勝生

### 要 約

本稿の目的は、幼児教育における文字に関する研究と実践について、文字認識や指導観を明らかにし現状の課題を整理すること、そして、文字の芸術・表現的側面に焦点を当てた文字の保育内容としての在り方を試行的に検討し、その可能性について考察を行うことである。

幼稚園教育要領及び先行研究の整理からは、①小学校入学の前から幼児の文字への関心は高まり、一定数の幼児が読み書きを始めていること、②保育現場では、文字指導に関する共通した認識や方針の共有がなされているとは言えず、文字指導という語への理解も曖昧な状況にあること、③間接的な文字指導として「文字に親しむ環境構成や遊び」の研究及び実践が研究上の関心として多くを占めること等が明らかになった。

また、文字の芸術・表現的側面に着目して「観る文字」という文字への関わり方について試案的に検討を行い、その書を導入した絵本の可能性について考察を行った結果、実際の導入に向けては具体的な検証等が必要であるものの、絵本を介して文字のもつ芸術・表現性を幼児に伝えるための課題を抽出することができた。

キーワード：幼児教育、文字環境、文字指導、書字指導、「観る」文字

## はじめに

本稿の目的は、①幼児教育における文字に関する研究と実践について、文字認識や指導観を明らかにし現状の課題を整理すること、②文字の芸術・表現的側面に焦点を当てた文字の保育内容や遊びとして試行的に検討し、その可能性について考察を行うことである。

文字とは、一般に意思や情報の伝達機能を伴った記号であると定義される。この定義は幼児教育においても採用されている。現行の「幼稚園教育要領」（文部科学省、2018）において、前述の文字認識を主に領域「環境」及び「言葉」にて確認することができる。また、東内（2018）は、文字の役割を「情報を得る役割」と「自分の思いを伝える役割」があるとし、生活や遊びの場面で、この二つの役割の必要感を実感し、文字が使える生活の便利さや、遊びの中での楽しさを味わうことができる実践が重要であると述べる<sup>1)</sup>。すなわち、文字は意思伝達のためのコミュニケーションツールであるとも言える。

一方で、保育現場での文字の取り上げられ方については、必ずしも共通の認識と了解がなされた上で実践されているとは言い難い状況がある。小野瀬（1995）は、幼児期の文字指導に関しては①慎重論、②肯定論、③必要論、④積極論、⑤否定論、の5つの語り口があるとし、研究者や実践者それぞれによって異なった立場を取っているとする<sup>2)</sup>。

文字指導というと、小学校教育のイメージを伴った一斉のドリルの教材を用いた読み書きの直接的指導を連想するかもしれない。文字の役割や認識を踏まえれば、保育者による働きかけにおいて中心を占めるのは直接的なドリルの指導ではなく、幼児が文字に親しむ環境づくりであり、保育者の関心は、どのような環境がより良い環境と言えるのかということになる。しかし、一方では学校教育との接続を見据え幼児期の内に正しい文字の指導<sup>3)</sup>を行うことが重要であると主張する研究も少なくない。

したがって本稿では、まず現行の幼稚園教育要領及び先行研究等での位置づけや文字に関する指導内容及び方法を整理する。特に、先行研究において

明らかにされている調査結果とその知見において、文字をどのように位置づけ論じてきたのかについて着目したい。

次に、文字の芸術・表現的側面に注目し、幼児の遊びや生活の中で“豊かに文字に触れる”ことを志向する文字の在り方について検討を行う。コミュニケーションツールとしての機能的側面及び就学準備の文脈としての読み書きという実用・技能的側面とは異なる、別の側面から文字の意味を見出そうとすると、それは芸術書道に象徴される日本の代表的な文化の一つである芸術としての文字にあると考える。これを暫定的に「観る文字」と呼び、その意義や実践的な可能性を探りたい。

以上のことにより、これまで必ずしも体系化されてきたとは言い難い幼児教育の文字の扱いについての現在地を示すことで、今後の幼児教育における文字をめぐる課題と展望を提示することができると考える。

なお、本稿においては、幼児期の子どもに対する保育・幼児教育を総称して「幼児教育」と記す。また「文字指導」及び「書字指導」については、保育現場で行われている幼児が文字に親しむための環境構成（＝間接的指導）と読み書き能力の習得指導（＝直接的指導）をまとめて「文字指導」と表記するが、文脈によって適宜補足の説明を加える。小学校以降の学校教育（主に国語の時間）にて行われる読み書きを中心とした文字の指導を「書字指導」と表記することとする。

## 1. 先行研究等に見る幼児教育における文字の扱い

### 1.1. 幼稚園教育要領における文字の位置づけ

『幼稚園教育要領解説』（文部科学省、2018）において文字に関する記述を探すと、主に（１）「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」、（２）領域「環境」、（３）領域「言葉」に確認することができる。以下、幼稚園教育要領等の記述を引用しながら確認したい。

### （１）「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関連

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」では、「（８）数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」の項目があり、ここでは「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。」と説明されている。

「幼児期の終わりに育ってほしい姿」とは、小学校入学までに期待される、特に５歳児後半になると見られてくる姿であり、育つ（育とうとしている）幼児の具体的な姿であると言われる。また、小学校教育との円滑な接続のために、小学校教諭との共有が求められている。ただし幼児が文字に対して抱く関心を出発点とし、重視されるべきは幼児自身の必要感であるということとは強調しておきたい。ここには、幼児の自発的で主体的な遊びや活動の尊重という幼児教育の原理原則が適応されていると解釈できる。

### （２）領域「環境」との関連

領域「環境」のねらいと内容では、文字に関しては次の記載が確認できる。

「ねらい-（３）身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。」

「内容-（10）日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。」

当該箇所を解説をみると、幼児にとって「自分が話している言葉がある特定の文字や標識に対応しているのを知ることは新鮮な驚き」であるため、教師は「文字との新鮮な出会いを体験できるよう環境を工夫する必要がある」としている<sup>4)</sup>。

加えて、幼児が「絵本や手紙ごっこを楽しむ中で自然に文字に触れられるような環境を構成することを通して、文字が様々なことを豊かに表現するためのコミュニケーションの道具であることに次第に気付いていくことができるよう」援助する必要があること、しかしながら「幼児が文字を道具として

使いこなすことを目的にするのではなく、人が人に何かを伝える、あるいは人と人が繋がり合うために文字が存在していることを自然に感じ取れるように環境を工夫し、援助をしていくことが重要である」としている<sup>5)</sup>。

「内容の取扱い」においては、「(5) 数量や文字などに関しては、日常生活の中で幼児自身の必要感に基づく体験を大切に、数量や文字などに関する興味や関心、感覚が養われるようにすること」としており、普段の生活の中で「絵本や保育室にある文字表現に関心を抱いたりすることは幼児にとって日常的なこと」であり、幼児の興味や関心から出発した遊びや活動を積み重ねることで「ごく自然に数量や文字に関する力は伸びていくものである」としている。したがって、「幼児期における数量や文字に関する指導は、(中略) 文字を正確に読めたり、書けたりすることを目指すものではない。(中略) 幼児期に大切にしたいことは習熟の指導に努めるのではなく、幼児が興味や関心を十分に広げ、数量や文字に関する感覚を豊かにするようにすること」が求められるとする<sup>6)</sup>。

以上のように、領域「環境」において文字の認識と扱い方は非常に明確に示されている。すなわち、幼児にとって文字とは、読み書きという国語科教育を想起させる知識・技能的な対象ではなく、保育者や友達等の他者と心を通わせるためのコミュニケーションツールであるという文字観である。そして、文字への関わりの質と量は、書字指導的な働きかけや習熟度に基づいた評価基準によって達成・測定されるものでなく、幼児自身の興味・関心に基づいた自発的な遊びと、その遊びを支える保育者による環境構成によって保障されるものである。

### (3) 領域「言葉」との関連

続けて、領域「言葉」の中の文字の扱いについても触れよう。領域「言葉」の内容には、「(10) 日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう。」とある。解説において、幼児期は、文字の機能や役割に気付き、使用する意味を学んでいく時期であるとし、文字への理解の深まりが、自らもその記号

を使用したいという欲求を呼び起こすと述べている。また「文字などの記号に関心を抱く幼児は、5歳児になるとある程度平仮名は読めるようになる」が、「書くことはまだ難しく、自分なりの書き方であることが多く、いずれにせよ「文字を使う喜びを味わうことができることを念頭に置いた指導をすることが大切である」としている<sup>7)</sup>。

「内容の取扱い」においても「(5) 幼児が日常生活の中で、文字などを使いながら思ったことや考えたことを伝える喜びや楽しさを味わい、文字に対する興味や関心をもつようにすること。」が大切であり、解説では「幼児にとっては文字も様々にある環境の一つ」であり、自分の遊びや生活の中に取り入れようとする姿が自然に見られるため、保育者は文字に関わる体験が幼稚園生活の中にあることを認識する必要がある、生活と切り離れた形で覚え込ませる画一的な指導ではなく、遊び等の中で文字を読んだり書いたり楽しさを感じる経験を重ねていくことや、文字について直接指導するよりも、幼児の話したい、表現したい、伝えたいという気持ちを受け止めつつ、文字を通して意味が伝わっていく面白さや楽しさが感じられることが重要であるとしている<sup>8)</sup>。

しかし、これに対して齋木・市原(2007)は、幼児期からの適切な指導の必要性を唱えながら、この領域「言葉」の表記をめぐる「文字の『伝える楽しさを味わう』ためには文字が読めること、書けることの両方が必要である。」と指摘する<sup>9)</sup>。文字を介したコミュニケーションの楽しさに読み書きの正確性は必要な要素であるだろうか。幼児の自己流の書き方であっても(=正確な字でなくとも)、その場において意味が伝わり成立すれば問題ないように思えるし、むしろそこに幼児の表現や遊びの醍醐味を見出す方がより幼児教育の本質に近いと言えるのではないだろうか。

以上、幼稚園教育要領における文字の認識と扱いについてここまで見てきた<sup>10)</sup>。次節では、幼児と文字に関する先行研究について網羅的に取り上げ、参照していきたい。

## 1. 2. 先行研究にみる幼児期の文字指導の実態

三田村（2020）は、現在の幼児教育における文字に関する指導を取り巻く状況として、（１）文字習得の早期化、（２）文字の早期教育への保護者の関心の高まり、（３）小学校との連携の難しさ、（４）幼稚園教育要領などによって幼児教育における文字に関する指導の在り方が明確になったこと、の４点を挙げている<sup>11)</sup>。（４）の指導の在り方の明確化については前項にて述べた通りであるが、これらの指摘は、幼児そのものというより幼児を取り巻く周囲の状況の変化について注意が払われるべきである。つまり、保育者や保護者の意識あるいは、幼小接続の必要性の強調という社会的要請等といった外的要因に関する指摘と言える。周囲の大人が、文字の重要性をどこまで意識し、どのような内容と方法を用いて子どもに指導ないし遊びや環境として取り入れるかが影響していると考えられる。以下、これまでの各先行研究や実践報告等を参照し、種々の現状について整理を試みたい。

### （１）幼児の読み書き能力に関する実態について

幼児の文字習得に関する研究においてしばしば引用されるものに国立国語研究所（1953年、1967年）が実施した幼児の平仮名の読み書きに関する調査がある<sup>12)</sup>。本調査では、両年の比較を通して幼児期の子どもの読み・書き実態が早期化しているとの報告がなされた。また、島村・三神（1994）は前述の国立国語研究所の調査を踏襲し、1988年に同じ内容項目を用いて東京都・愛知県の幼児を対象に調査を行っている。その結果、1967年との比較において５歳児の読み書きが出来る文字数が増加する等、さらに早期化が進んでいると結論付けている<sup>13)</sup>。

また、内田・浜野・後藤（2009）は、幼児のリテラシー習得に関する国際比較調査の結果、平仮名の文字の読み書きにおける日本の５歳児の平均得点は極めて高く、男女ともに満点に近いと報告をしている<sup>14)</sup>。

他にも、天野（1986）や一色（1985）の研究でも言及されているように、４～５歳児になると文字に興味を持ち、平仮名を読んだり中には書くことも

できるようになる<sup>15) 16)</sup>。このことから、学校教育において小学校1年生から開始される書字指導・教育以前に、個人差こそあれ幼児の多くが文字の読み書きについて一定程度習得しているのが現実である。

その他、幼児の読み書き能力に関しては、幼児の身体的発達との関連も多くの研究者が指摘している。例えば、塩出(1992)や小野瀬(1996)は、鉛筆の持ち方は手指の巧緻性と関係していること<sup>17) 18)</sup>、須田(2007)は字形を分析するための目の発達が文字を書くためには必要だと指摘する<sup>19)</sup>。高山(2017)もまた、文字を書くためには、手指の巧緻性と目と手の協応能力が不可欠であり、そのためには0歳児からの指先遊びや身体発達の順序性を意識して全身運動・粗大運動の重要性を述べている<sup>20)</sup>。

## (2) 保育者等の文字指導に関する意識及び指導実態(方法)について

冒頭でも示したように、小野瀬(1995)は、幼児期の文字指導に関しては①慎重論、②肯定論、③必要論、④積極論、⑤否定論、の5つの立場があるとする。この分類は、大人側の文字指導認識の実際を捉える枠組みとしては有効であると考えられる。以下、その内容を引用したい<sup>21)</sup>。

①慎重論：幼児期においては園の生活や日常生活の中で文字への関心を持たせ、親しませることを目的とし、そのための環境を重視するが、読み方や書き方の直接指導はしない。

②肯定論：就学前の幼児のほとんどが、ある程度の読み書きの能力を備えている時代だから、もしも文字の読み書きを学習を全くしていないと、入学後に子どもが苦勞することが予想される。就学前には、ある程度の文字学習はさせておきたい。

③必要論：幼児の学習意欲と知的水準に合致する限り、彼らの言語能力を高めるための文字学習は、むしろ必要である。

④積極論：幼児の豊かな才能を開花するための手段として、できるだけ早期に文字指導を推進させることこそ重要である。



⑤否定論：文字の学習は小学校からでよい。この時期に文字を指導することは知的偏重になるばかりか、他の活動や学習を阻害し、ひいては幼児の人格の全面的発達を阻害する。

小野瀬の分類に照らせば、幼稚園教育要領は慎重論の立場をとっていると考えられるが、実際の現場保育者はどうだろうか。保育者等の文字指導に関する意識調査として、三田村（2020）の調査・報告が挙げられる。三田村は、小学校1年生の担任教諭、幼稚園・保育所・認定こども園の保育代表を対象に、小学校教諭と保育者の文字に関する指導について質問紙による意識調査を行った。その結果、保育者、小学校教員共に、①幼児の平仮名への興味・関心を高めること、②（自身の）名前の読み書き、③平仮名を読むこと、の3点について特に大事であると考えているとしている。また、鉛筆の持ち方や、筆順や形、平仮名を書くことについては、保育者と小学校教諭とで意識が分かれ、小学校教諭の中でも、これらを重視するか否かにばらつきがあることを報告している。続いて、保育者側が有する文字指導に関する悩みや課題意識として一番多く挙げられたのが「文字への興味関心の個人差への対応」であり、次いで「筆順、鉛筆の持ち方の指導」であったことを報告している。さらに、同調査の中で、小学校教諭より保育者の方が、平仮名を書くことができるようにする指導の必要性について「とても大事」「大事」と答えた割合が高かったことが示されており、保育者は、「子ども達が就学して困らないようにするため、幼稚園や保育所等で何をどの程度まで指導すればよいのかということを教えてほしいと考えている」こと、「保育者が幼児に筆順や形の指導をする際に本当に正しく指導できているのか自信を持っていない」と考えているとした<sup>22)</sup>。当該調査では保育者側の回答者属性までは明らかにされていないが、これらの結果から、近年、幼小接続の重要性が強調されている中であって、保育者側の文字指導への意識が小学校教諭に比して高まっている可能性も窺える。

一方、藤本（2018）は保育者の文字指導観について興味深い指摘を行って

いる。保育者への質問紙調査から、保育者が「文字指導」という語からは想起するのは、「文字について直接指導する」ことであり、実際の保育において行っている「文字を通して何等かの意味が伝わっていく面白さや楽しさを感じられるように指導する」ことは実際には行っているにもかかわらず、それが意図的な指導として認識されていないという<sup>23)</sup>。この文字指導＝直接的で小学校的な書字指導という保育者の捉えが、ドリル的な一斉指導のような幼児に文字を書かせる指導を想起させ、結果として苦手意識や抵抗感の要因になりうるということが推察される。こうした、言葉と実際の実践のずれ、もしくは保育者の文字指導に対する無自覚さが問題を潜在化させている可能性を示唆するものである。ちなみに前出の三田村（2020）の調査の中では、調査対象33園の内、読みについては24%、書きについては30%の園がドリル的な指導も取り入れていることが報告されていた<sup>24)</sup>。ドリル的な指導については、前章で述べた幼稚園教育要領における文字の扱いの捉えとはそぐわないと考えられるが、一定数の園で実施されているのは事実であろう。ドリル的な指導の問題点としては、文字習得に伴う内面的な育ちが伴わないことへの懸念や、その指導効果（有効性）についての疑問が指摘されているが、例えば関口・柳田・箱崎（1994）は、ドリル的な一斉指導を採用している園を含む文字指導方法が異なる3タイプの園で比較調査を行い、ドリル的な一斉指導が必ずしも効果的でないことを指摘している<sup>25)</sup>。

そのような中で、幼児期であったとしても読み書きを教えるにあたっては、より文字の正確さや身体機能面への注意を払うことの重要性を指摘する論者もいる。例えば、市原・斎木（2007）は、小学校の国語科書写の指導につながるよう、姿勢や筆記具の持ち方に関する指導を充実させた「自分の名前を平仮名で書く」という実践を行っている。実践指導を通して文字に対する高い関心を持つ年長児に対しては、小学校への接続をふまえた書字指導が可能であること、実践成果の普遍化のために保育者に対する書字に関する再教育カリキュラムや幼稚園で使用可能な教材開発の検討が求められるとしている<sup>26)</sup>。

さらに齋木（2015）は、小学校1年生を書字指導入門期であるとし、入門期の適切な指導のためには、小学校での文字学習に寄与するような幼児期の書字に関する教授支援の検討が必要であり、保護者・保育者・小学校教諭が共通理解を図りながら教授・援助の在り方を考えていかなければならないと述べる<sup>27)</sup>。

他にも、巢立・和田（2014）は、小学生で鉛筆等の筆記具の持ち方が正しくない児童が多くその原因は、文字を書き始める幼児期に望ましい持ち方を大人から教わっていないことが影響していると述べている。さらに、実際の保育園での観察調査から、①（保育室等の）文字環境の乏しさ、②手書き文字が少ない（ポップ体等ほとんどパソコン等の活字）という課題を指摘し、対策として、幼稚園教育要領（少なくとも解説）等に「筆記具の持ち方指導」「書く時の姿勢指導」の規定を加えること、園内の文字環境・文字活動を豊かにすること（手書き文字を増やす等して幼児が文字から刺激を得られるような環境づくりや活動）」を提案している<sup>28)</sup>。

一方、当然ながら文字に関して小学校教育への接続を意識することへの懸念や批判もある。例えば、佐藤（2018）は、小学校就学以降の子どもの学習と深いつながりがある文字を使用した保育内容は、「ともすれば、幼児教育・保育の中で小学校教育の前倒しになってしまう可能性も含んでいる」と述べ、幼小接続の必要性が叫ばれている中であって、現在、幼児教育・保育における文字遊びは、何を育もうとしているのか明確に示す必要があるとしている<sup>29)</sup>。同様に松本ら（2014）も学童期の教育内容と評価方法を先取りする傾向を導きかねないことに一定の懸念が示されており、中でも文字を中心としたリテラシーの獲得は、最も議論になることの多いトピックであるとの認識を示している<sup>30)</sup>。

そのような中、首藤（2013）は、幼児も文字の獲得や正確性に対する大人の姿勢について次のように述べる。

「幼い子どもが片言を発するとまわりの大人たちはその片言をほほえましく受け止める。（中略）同じことが文字の読み書きについても言える

はずである。しかし文字のことになると、その寛大さを失う大人や指導者が多いようである。」<sup>31)</sup>

「幼児の生活から文字を排除するのは不可能なのである。ならば問題は、幼稚園や保育園では、文字をいつごろ、どの程度、どのように扱えばよいかといことになる。が、これも難しく考える必要はない。子どもが学ぶ他の事柄と同じように、一人一人の子どもの育ちにに応じて、おおらかに見守りながら、必要に応じて励まし、助け、導けばよいだけのことである。(中略) 文字が役立つ環境や、文字で遊ぶ環境を作ればよいのである。してはならないと断言できる指導は、いやがる子どもをつかまえて文字の練習を無理強いすることである。」<sup>32)</sup>

首藤に言わせれば、字形や筆順の違いについて「子どもの誤字はいわばその子が想像した文字であり、その子の工夫の産物」であり、「教えようと教えまいと自分で書き始めるのが子ども」なのだから、育ちの途上における自然な現象として長い目で気長に丁寧に関わることが重要であるとする。そもそも、幼児が文字を使って友達と遊んだり、コミュニケーションを図ったりする場合、正確さはそこまで問題にされないかもしれない。字形等の正しさを気にするのは専ら大人であり、文字は書き手と読み手が文字の記号性を自覚しているのであれば、多少の誤りや変形は許容される。平山（2013）も「記号は一定のルールに従っていなくてはならないが、使用する者が誤解せずに意味が伝われば、その機能を果たすことが了解されているのである」とする<sup>33)</sup>。

以上、保育者等の文字指導に関する意識及び指導実態についてみてきた。ここから、保育現場や研究において多種多様な意見や立場があることが窺えた。特に、文字指導を巡っては、間接的か直接的かが中心的議論であり、意見が二分されている構図があるであろう。このことは藤本（2018）の指摘と地続きである。ただし、この両者は方法論の違いでもある。つまり「文字」そのものは幼児の生活の中にありふれているものであり、それがゆえに重要

な生活構成物であって、幼児期における文字の普遍性や意味そのものをいたずらに否定するものではないという点は確認しておきたい。

### （３）子どもの文字への興味・関心を促す環境構成や保育内容について

高山（2017）は、幼児が文字に関心をもつ環境として、文字・言葉の絵本、しりとりカードやカルタ、文字スタンプ、手紙（封筒と便箋を環境として用意）等を挙げる。また、ペンや鉛筆といった描画の道具も、幼児の興味・関心や子どもの育ちの状況に合わせたものの精選し、様々な線や色のものを用意しておくことが大切であるとしている<sup>34)</sup>。加えて、子ども同士や保育者と子どもの話し合いの記録<sup>35)</sup>等を保育室の一面に掲示しておくことも有効であるとする。

前出の藤本（2018）も、保育者の文字指導観についての調査の中で、回答から得られた幼児期における文字との関わりを表1のようにまとめている。この表の中で重要なのは「文字環境」と「遊び」それぞれに対応する保育者の役割が「文字環境を整える」と「文字に出会う楽しさを伝える」となっている点であろう。具体的な文字遊びや文字に親しむ環境として、新井・廣瀬・山本（2023）は、自身の名前で使われている平仮名だけで構成された「おなまえカルタ」を提案しており、その有効性や課題を検討している。

表1 幼児期における文字との関わり

区分	事 例		保育者の役割
文字環境	個人名の標示	名札、持ち物、作品、プリント、ロッカー、靴箱、当番表など	文字環境を整える
	物の名称標示や空間の標示	ドア、窓、机、時計、遊具、園庭の木・野菜・花	
	教室・施設・設備の標識	トイレ、相談室、職員室など	
	掲示や板書	月日・曜日・天気、給食の献立、行動予定や手順、五十音図、歌詞、ことわざ、百人一首、詩	
	園外における標識	標識、看板、車のナンバープレートなど	
遊び	絵本・紙芝居		文字に出会う楽しさを伝える
	カード遊び〔カルタ、トランプ、言葉カード〕		
	手紙のやりとり		
	わらべうた、手遊び、歌遊び、言葉遊び		
	その他玩具〔パズル、ブロック、文字スタンプ〕		

出所：藤本（2018）p.9より引用

保育学生による作成と試行的遊びの分析結果ではあるが、カルタの上限枚数が自分の名前の文字数であるため、幼児が扱いやすく繰り返し遊べることを利点として挙げている<sup>36)</sup>。

さらに、幼児の絵本づくり遊びや手紙のやりとり場면을対象に調査・分析を行った佐藤（2018）は、幼児が自ら文字に関わって自発的に遊ぶ場面では、（１）絵と文字の併用による遊び、（２）文字を書く満足感を味わう、（３）他者を意識した文字の３点があるとし、スキル獲得を目的とする関わりではなく、多様な文字遊びと環境の保障が文字への自然な興味へと繋がることを示唆している<sup>37)</sup>。

## 2. 文字の芸術・表現的側面へ注目することの育的意義と可能性

以上の先行研究を踏まると、これまでの幼児教育における文字の扱いについて以下のように整理することができよう。

- ① 幼児期の文字（平仮名）の読み書きの能力は高く、個人差はあるものの4～5歳児では多くの幼児が文字に興味を持ち、小学校入学前に書くこともできる幼児もいる。
- ② 幼児期の文字の扱いについては様々な立場があるものの、文字指導といたった際に保育現場や保育者がイメージするのは文字の読み書きに関する直接的な指導である。一方、文字に興味や関心を持つための環境構成の工夫や配慮は多くなされている。しかし、このことは「文字指導」の一環としては認識されていない。
- ③ 読み書きについてより直接的・具体的な指導の必要性を主張する立場では、小学校への接続を念頭に置き、鉛筆の持ち方や筆順、姿勢等に関する適切な指導法や教材の開発及び保育者への指導の必要性を指摘している。
- ④ 環境構成を充実させることによって「文字に興味や関心をもつ、文字に親しむ」こと重視する立場では、その主たる方法は、絵本や言葉に関連する玩具、言葉遊び等を用いている。
- ⑤ 多くの先行研究において、研究上前提になる文字認識は「他者とのコミュニケーションや遊びを豊かにするツールとしての文字」もしくは「読み書きの対象」であり、文字がもつ他の側面に注目しようとするものは見受けられない。

これらを踏まえて、ここから文字がもつ芸術・表現の側面に注目して、幼児期における新しい文字認識の可能性について検討していきたい。東内(2018)は、文字習得の目的は、人間が創り出した生活を豊かにする様式としての文化として獲得させるのだと言う<sup>38)</sup>。生活を豊かにする文化とは一体何であろうか。我々人間が創る文化の最も代表的なものの一つとして芸術表現が挙げられよう。さらに、文化を人間により創造された有形・無形なものの総体と捉えると、無論、言葉や言語、文字も含まれるであろう。まさに、その両者が融合して成立しているのが日本の書・書道と言える。そして、書

を含んだ芸術とは、必ずしも表現者（作り手や創作者）だけによって完結するものではない。音楽であれ美術であれ、鑑賞者すなわち観客や聴衆と一体となることによって成立するものである。表現とは、一義的には内から外に向かうものでありつつも、それを受け止める他者がいることによって、表現が表現として認知される。その意味では、文字を使った芸術である書道もまた、幼児教育の場で取り上げられる場合、幼児が実際に筆を手に墨で書くことを絶対的な条件とせず、「観る」という関わり方も可能であると考ええる。すなわち、文字を情報伝達のコミュニケーションツールとしてではなく、また読み書きの対象としてでなく、観る対象と見なすことで第三の意味を見出そうとするのである。このことは、これまで殆ど検討されてこなかったと思われる。幼児教育の場で書道が話題になる場合は、ほとんどが書初め体験といった単発的な体験イベントであろう。また、年長児などで継続的に取り組まれている場合であったとしても、当然ながら幼児が何らかの文字を書くことを前提にしている。

観るとは、「観察する」「鑑賞する」という行為に近い。「観察」や「鑑賞」とはただ漫然と眺めるのではなく、意識的に注視し、そこから何らかの意味を感じ取ろうとしたり、それに対して自分なりの直感的印象を含む思考や感情を巡らせたりする行為である。その意味で、「観る」とは非常に能動的な行為である。例えば、書き手としての書道を経験したことが殆どない者であったとしても、書道の作品を観た時には何らかの印象を受けることがある。目の前に書かれている文字が意図的に崩されていたり、知らない書体によって書かれていて認識できない、もしくは認識できてもその言葉の意味が分からなかったとしても、何らかの印象（例えば、力強い・柔らかい・繊細だ・冷たい・鋭い等）を持つことがある<sup>39)</sup>。それは、私たちが字形や作風を観て、それに対応する印象を感じ取っている証拠でもある。例えば同じ文字や文章であっても、その字体やフォントが異なれば受ける印象が変わることもその表れと言えよう。石原・熊坂（2002）の研究では、大学生を対象にした調査において、文字のフォントの違いによって見る者のイメージが変化す



ることを実証的に明らかにしており、書字による視覚的な刺激が、その文字が有する基本的情報を強化したり補足したりする働きがあることとしている<sup>40)</sup>。同様の効果が幼児の場合でも成立するどうかは別途検証が必要であろうが、例えば絵本においても、場面や展開によって文字の大きさやフォントを変化させていたりすることもある。そう考えると、「文字を観る」という行為は、絵や映像を観る、音楽を聴くという行為と同根であると言えるかもしれない。

さらに、文字を観る時、文字を「書く・書ける」ということとは無関係である。なぜなら美術や音楽分野でも同じことが言えるが、鑑賞者は主体的な受け手として尊重されており、その文字をどのように観て何を感じるかは強制されない。一方、「読む・読める」（書かれてある言葉の音と意味が理解できる）かどうかは文字を「観る」行為に影響することが予想される。ただし、「読めない」場合でも、「耳で聞く（＝読んでもらう）」ことで代替可能であると考えられる。まさしく絵本を読んでもらう時の状態がこれに該当するであろう。幼児は、文字が読めなくても絵本の世界を楽しむことができる。前出の首藤（2013）は、自分では文字は書かないが文章を作る行為（「口頭作文」）や自分では文字を読むわけではないが、書かれている文字や言葉を聞いて理解する行為（「耳からの読み」）は、文字認識における基盤をつくる活動であるとする<sup>41)</sup>。このように、文字の芸術・表現的側面に焦点を当て取り上げ、その意味や効果について検討することは一定の意味を有すると考える。

### 3. 文字への興味・関心を育むための「絵本」活用の意義

さらに、首藤（2013）は、絵本との出会いは文字との出会いでもあるとし、絵本との出会いの場を作り、書き言葉の豊かな世界を体験させることの重要性を説く<sup>42)</sup>。絵本の中の文字は幼児の文字の読み書き能力や言葉の意味の理解力に関わらず、早い時期から文字に触れることのできる最適な文字環境といえることができよう。絵本以外にも園内に文字はあふれているが、絵本は文

字のみならず絵という視覚的情報も同時に読者に届けることができる。そのため、子どもたちは描かれている絵の内容や色彩等から様々な印象や情報を受けとると同時に、文字を見つめることができ、ただ文字のみを見る場合に比べ、文字への興味や関心はさらに高まることが期待できる。さらには読み聞かせを聴く場合は、文字という視覚情報に加え、保育者が発する聴覚情報も相まった形で幼児は受け取ることになる。就学前の幼児は読み、特に書きにおいて個人差が大きいことが指摘されているが、絵本という文字環境の中では、その読み書き能力に左右されることなく、子どもたち一人ひとりが自身の読み書き能力に応じて、自然に文字に触れることのできる文字環境と言えるだろう。

### 3. 1. 絵本への書の導入に向けて

ここでは、活字にはない書（手書き文字を含む）の特質について、書の代表的な構成要素である線質と字形に関して概説することで、書を絵本に導入する意義に言及したい。そして最後に、絵本内の文字を想定し、書として表現したサンプルを示すことで、今後の実践研究に向けた足掛かりとしたい。

#### （1）線質について

書の代表的な構成要素の一つとして線質がある。『高等学校学習指導要領解説』（文部科学省、2018）において、「線質とは、書かれた線のもつ性質を指し、線の強さ、豊かさ、艶やかさ、軽やかさ、陰しさ、深さなどの質感をいい、」「用具・用材の特性や用筆・運筆から生まれる」とされている<sup>43)</sup>。

用具・用材に関しては、さまざまなものがあるが、その中心的なものとして、古来より「文房四宝」とよばれる、筆・墨・硯・紙があげられる。これらの特徴を生かし、目的や用途に応じて効果的に表現を工夫することによってさまざまな線を表現することができるのである。例えば、筆者が書いた（図1）の線を参照されたい。線①は、強くごつごつとした印象を与えることをねらいとして、硬い筆毛を用いて、少量の濃い墨を筆に含ませて滲みの

少ない画仙紙に線を書いたものである。一方、線②は、柔らかく温かい印象を与えることをねらいとして柔らかい筆毛を用いて、たっぷりと淡い墨を筆に含ませて滲みのある画仙紙に線を書いたものである。

用筆・運筆に関しては、古来よりその解釈や用いられ方はさまざまであるが、おおそ用筆とは筆の使い方や筆毛の働かせ方のことであり、運筆とは筆の運び方ということができよう。この用筆・運筆を工夫することによってさらにさまざまな線を表現できるのである。ここでは例として、図2-1、図2-2の通り運筆の速度の変化による表現と起筆（筆が紙に触れるときの用筆）における穂先の向きの変化による表現を示した。いずれも用具・用材は同じものを使用している。

以上、線質について概説してきた。これらの例は無数にある中のほんの一パターンにすぎず、用具・用材、用筆・運筆を工夫することで、あらゆる線質の表現が可能となり、書を見る者が受ける印象に大きく影響するのである。手書き文字や書における線質とは、活字では味わうことのできない文字の芸術的側面の重要な構成要素の一つなのである。

## （２）字形について

字形も書を語るうえで欠かすことのできない重要な要素といえる。『高等学校学習指導要領解説』（文部科学省、2018）において、「字形とは、造形的な美しさを伴った文字の形のことであり、点画によって形づくられ、古来、結構あるいは結体といわれてきたことに当たる。」「字形を構成する要素としては、点画の位置、長短、方向、曲直、分間、肥瘦、疎密といったものから、一文字の均斉・均衡、概形（外形）にいたるまで、種々のものがあり、さらに、文字の組み立て方や筆順によっても字形は異なってくる。」とある<sup>44)</sup>。つまり、字形といっても数多くの要素があり、それらが複合的に重なりあうことで、書を見る者にさまざまな印象を与えるのである。その一例として示したのが図3及び図4である。図3では、文字の概形（外形）を縦長・扁平・三角形・逆三角形と四種になるよう意識して書いたものである。同じ文字で

あってもそれぞれがもつ味わいや受ける印象が異なることを実感することができるのではないだろうか。

また図4では、文字の中の空間に違いをもたせたものである。一つが文字の中の空間を広くとり、懐の広い字形にしたものである。もう一方は、文字の中の空間を狭くし、引き締めたものである。ここに示したものは、あくまでも一例にすぎず、字形を工夫する際に縦長といってもその縦と横の割合はさまざまにまだ何通りも考えられる。だがここで注意しておきたいのが、前掲の高等学校学習指導要領解説にある「字形とは、造形的な美しさを伴った文字の形」という部分である。さまざまな字形の変化が可能であっても、そこに造形的な美しさが伴っているかは注意深く検討する必要がある。まして

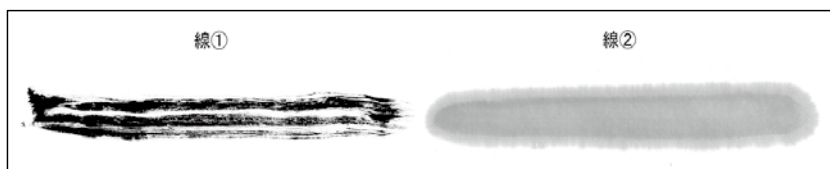


図1 用具・用材の違いによる線質の変化（筆者八谷作成）

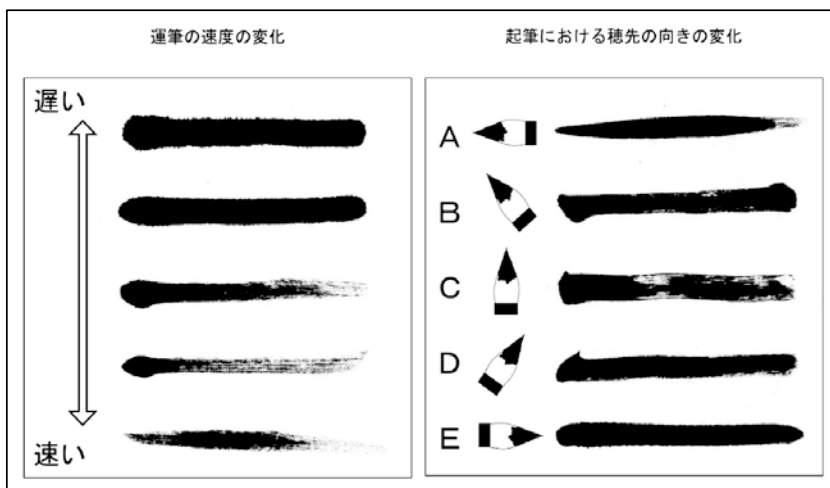


図2-1 用筆・運筆の違いによる線質の変化（筆者八谷作成）

や、絵本内の文字であれば可読性はもちろんのこと、そこに美を伴った造形であるか、その書は幼児たちにとって文字との豊かな出会いとなりうるものか、幼児に対して十分に刺激を与えうる書（文字）であるのか、客観的な視点から検討を重ねることが求められよう。

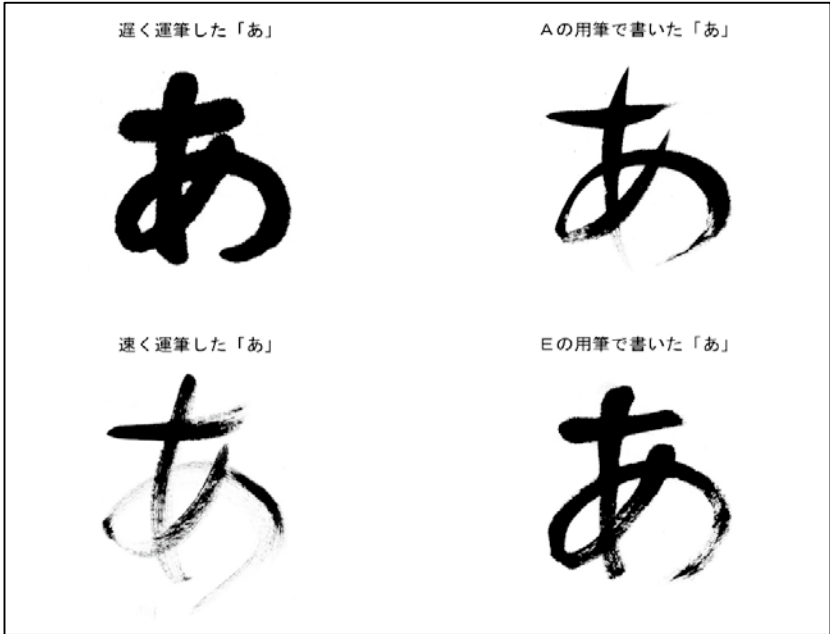


図 2 - 2 線質の違いによる「あ」の表現（筆者八谷作成）

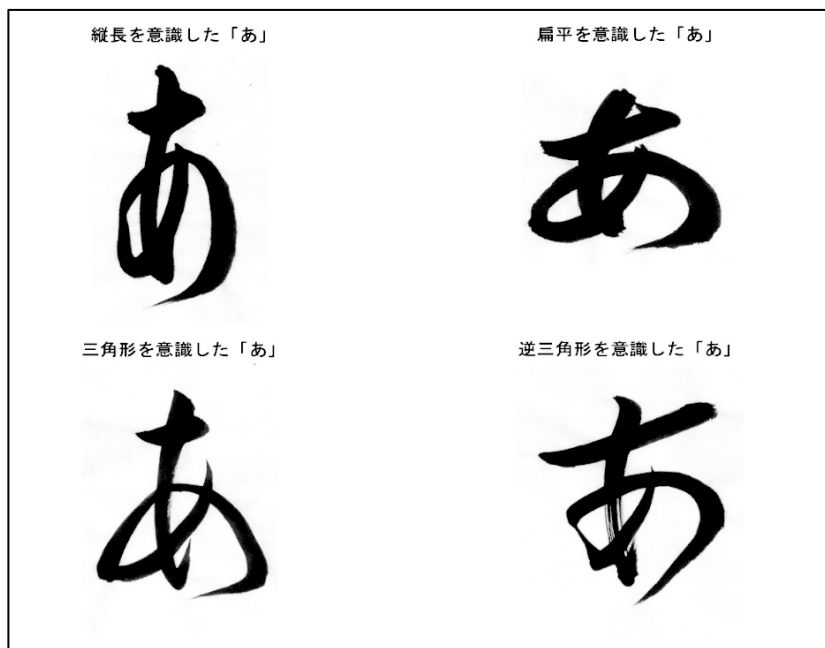


図3 文字の概形（外形）の変化（筆者八谷作成）

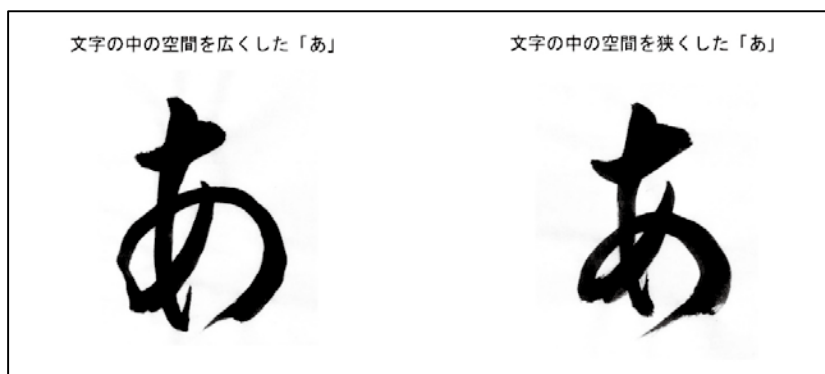


図4 文字の中の空間の変化（筆者八谷作成）

### 3. 2. 絵本内の文字を想定した書の試作

具体的な絵本の内容に関する検討は今後の課題であるが、その足掛かりとして絵本内の文字を想定した書の試作を図5に示す。その際、前述した書の特質である線質や字形を中心に工夫することとし、さらに文字の大きさや紙面のどの位置に文字を配置するかといった全体の構成にも配慮した。ここで示した例は名詞、動詞、オノマトペであるが、これらの組み合わせや文章の構成、実際の絵本としての運用に関しては、今後また新たに検討すべき課題である。また、書としての表現は幼児と文字との豊かな関わりを実現させることが期待されるが、一方で絵本のストーリーの世界との適切なマッチングにも配慮することが必要である。文字と絵との効果的なバランスや組み合わせに関しても、お互いが引き立たせ合うような構成を考えていく必要がある。

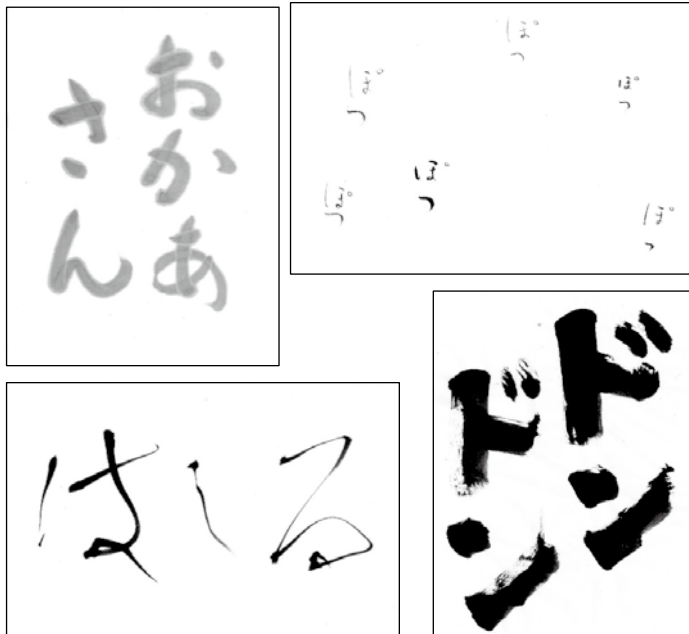


図5 絵本内の文字を想定した書のサンプル（筆者八谷作成）

## おわりに

文字の中でも、手書き文字や書は、特に表現的側面が前面に押し出されている。手書きの文字や書は、見る者に様々な印象を与え、時には感情を揺さぶる。表記された言葉の意味に加え、“どのように伝えるのか”という表現の意図や工夫が加わることで、単なる情報伝達機能を超えた、より内面的なものとして再構成される。

幼児が文字への関心を抱き、より親しむための方法としては環境構成や遊びの充実が主流となっているが、それは単に幼児の周りにたくさんの文字環境があれば良いということではない。様々な文字が、様々な方法で提示され、幼児の興味を喚起する環境として構成されている必要がある。いわば、文字の多様性とその保障である。幼児教育においても文字の芸術・表現的側面からの再定義を試み、文字とは読む、書くだけではない「観る」という文字への関わり方への検討をしていくことが、新たな文字認識と環境構成の視座を提供することになるのではないだろうか。

一方、この「観る文字」と、従来行われてきた単発・イベント的な書道体験とは一線を画すための工夫や配慮が求められるであろう。お正月の書初め体験や、書道団体等による書道体験・書道パフォーマンスとは異なる意味づけと取り組みの目的（保育のねらい）を明確に定めておく必要があるし、「観る文字」を可能とする諸理論の検討も本稿では殆ど行えていない。さらに、幼児期の文字認知のメカニズム（＝「観る文字」が可能か）と他の芸術表現の認知の相違についても明らかにする必要がある。このあたりは今後の研究上の課題としたい。

## 注・引用文献

- 1) 大沢裕・野末晃秀編、谷田貝公昭監修（2018）『環境（コンパクト版 保育内容シリーズ）』一藝社、東内瑠里子「第7章 数量や文字などへの興味」、p.60
- 2) 小野瀬雅人（1995）『入門期の書字学習に関する教育心理学的研究』



風間書房、p.8

- 3) ここで、正しい文字の指導とは字形、筆順、持ち方、姿勢等に対する指導のことを指す。正しい字形や筆順を指導するにあたっては、より効果的な書字練習プリント等の教材の開発に関する研究もなされている。例えば、齋木（2007）「幼稚園の文字指導における理論と背景 一小学校への接続を踏まえて」 茨城大学教育学部紀要 第56巻、23-34の研究などを参照されたい。
- 4) 文部科学省（2018）『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、p.204
- 5) 同上書、p.204
- 6) 同上書、p.213
- 7) 同上書、p.224
- 8) 同上書、p.231
- 9) 齋木久美子・市原洋子（2007）「幼稚園の文字指導における理論と背景 一小学校への接続を踏まえて」 茨城大学教育学部紀要 第56巻、23-34
- 10) ただし、幼稚園教育要領の変遷や記述の変化に関する研究（例えば、水野（2000）や巢立・和田（2014）など）をみると、改定を重ねるにつれて文字の位置づけがより重要視され、小学校との接続を意識化した傾向にあることを指摘し、幼児期から文字に触れるように促す内容へと変化してきていると指摘する研究も存在する。
- 11) 三田村雅人（2020）「幼児期の文字に関する指導：小学校との連携をふまえて」 仁愛大学研究紀要人間生活学部篇、第12巻、43-54、p.43
- 12) 国立国語研究所（1972）『幼児の読み書き能力』東京書籍
- 13) 島村直己・三神廣子（1994）「幼児のひらがなの習得—国立国語研究所の1967年の調査との比較を通して—」 教育心理学研究、第42巻、1号、70-76
- 14) 内田伸子・浜野隆・後藤憲子（2009）「幼児のリテラシー習得に及ぼす社会文化的要因の影響：日韓中越豪国際比較調査—お茶の水女子大・

ベネッセ共同研究2008年日本調査報告」お茶の水女子大学グローバル  
COEプログラム格差センシティブな人間発達科学の創成拠点国際格差  
班プロジェクト報告書

- 15) 天野清 (1986)『子どものかな文字の習得過程』秋山書店、p.473
- 16) 一色八郎 (1985)『幼児の手の発達と文字の指導』黎明書房、p.15
- 17) 塩出智代美 (1992)「幼児期における書字指導 (上)」『書道研究53』  
萱原書房、p.96
- 18) 小野瀬雅人 (1996)「幼児・児童における筆記具の持ち方と手先の巧  
緻性の関係」鳴門教育大学研究紀要教育科学編、第11巻、151-160
- 19) 須田清 (2007)『かな文字の教え方』むぎ書房、p.107
- 20) 高山静子 (2017)『学びを支える保育環境づくり：幼稚園・保育園・  
認定こども園の環境構成』小学館、p.61
- 21) 小野瀬雅人 (1995)『入門期の書字学習に関する教育心理学的研究』  
風間書房、p.8
- 22) 三田村 (2020) 前掲書、p.46、p.47、p.50
- 23) 藤本朋美 (2018)「保育者の文字指導観に関する考察－保育者は幼児  
の文字との関わりをどのように捉えているのか」南九州大学人間発達研  
究、第8巻、3-13
- 24) 三田村 (2020) 前掲書、p.52
- 25) 関口はつ江・柳田光穂・箱崎宏子 (1994)「幼児の読み書き能力の発  
達差の要因について」日本教育心理学会総会発表論文集、第36巻、p.74
- 26) 市原陽子・斎木久美 (2007) 前掲書、p.33
- 27) 斎木久美 (2015)「小学校入門期のひらがな書字指導に関する一考察」  
茨城大学教育学部紀要 (教育科学)、第64巻、325-334、p.326
- 28) 巢立早希・和田圭壮 (2014)「幼児期における文字指導に関する一考  
察 ～園における実態調査に基づいて～」福岡教育大学紀要、第63巻、  
第五分冊、芸術・保健体育・家政科編、83-93
- 29) 佐藤智恵 (2018)「幼児はどのように文字を使用して遊んでいるのか：

- 領域「環境」における文字に注目して」神戸親和女子大学教職課程・実習支援センター研究年報、第1巻、97-105、p.98
- 30) 松本博雄・伊藤崇・常田美穂・三原菜月（2014）「幼児期における文字表現と文字使用：絵本作り活動における文字の機能から」心理科学研究会『心理科学』編集委員会編、第35巻2号、53-63、p.53
- 31) 首藤久義（2013）「就学前の読み書き指導の基本原則」千葉大学教育学部研究紀要第61巻、255-262、p.258
- 32) 同上書、p.260
- 33) 平山許江（2013）『幼児教育 知の探究 領域研究の現在＜環境＞』萌文書林、p.235-236
- 34) 高山（2017）前掲書、p.60
- 35) いわゆるマインドマップやウェブ図等と呼ばれる、子ども達の話合い活動等の内容を模造紙等に文字や図で示したもの。プロジェクト型保育の実践やサークル・タイム等の記録としても用いられる。
- 36) 新井しのぶ・廣瀬由莉・山本翠（2023）「幼児向け『おなまえカルタ』の提案：文字に親しむ物的環境の遊具として」中村学園大学発達支援センター研究紀要、第15巻、21-23、p.21
- 37) 佐藤智恵（2018）前掲書、p.104
- 38) 大沢裕・野末晃秀編、谷田貝公昭監修（2018）前掲書、p.61
- 39) 小学校での国語科書写における書字指導で用いられるいわゆる基準文字（一般的にお手本とされる標準的な文字）があるが、それを学習上最適な字形であるとすれば、芸術書道においてはそこから逸脱することもしばしばであり、むしろその逸脱こそ表現かつ個性であると言える。そうした様々な表現や、書道にみられる技法としての「崩し」が許容されるがゆえに表現の多様性が保障され、観る者に対して何らかの印象を与えられ思考えられる。その意味では、書き手と鑑賞者の間で、感情の伝達が行われているとも言えるし、書き手の意図や表現したいものの解釈の妥当性はさておき、鑑賞者側が文字を観て楽しむ（味わう）という行為

がその場において成立していると言える。

- 40) 石原次郎・熊坂亮 (2002) 「フォントの違いによるイメージの伝達効果」  
北海道大学ドイツ語学・文学研究会、独語独文学研究年報、第29巻、  
25-40
- 41) 首藤久義 (2013) 前掲書、p.260
- 42) 同上書、p.259
- 43) 文部科学省 (2018) 『高等学校学習指導要領解説 芸術編』 p.279、301
- 44) 同上書、p.281

**A consideration of teaching characters in early childhood education  
-Concerning the nature of characters from an artistic and expressive  
perspective-**

FUTAGOISHI Ryota, HACHIYA Katsuki

Abstract

The purpose of this paper is to clarify character recognition and teaching philosophy and organize the current issues regarding research and practice on characters in early childhood education, and to tentatively examine characters as childcare content and play focusing on the artistic and expressive aspects, and to consider the possibilities.

From the kindergarten education guidelines and previous research, it became clear that 1) children's interest in characters increases even before entering elementary school, and a certain number of children begin reading and writing, 2) it cannot be said that there is a common recognition or shared policy regarding character instruction in childcare settings, and the understanding of the term "character instruction" is unclear, and 3) the research and practice of "environmental composition and play that familiarizes children with characters" as indirect character instruction accounts for a large proportion of research interest.

In addition, focusing on the artistic and expressive aspects of characters, a tentative proposal was made on a way of relating to characters called "observing characters," and the possibility of introducing such characters into picture books was considered. As a result, although concrete verification is necessary for actual

introduction, it was possible to extract issues for conveying the artistic and expressive nature of characters to children through picture books.

Key Ward: Early childhood education, writing environment, character instruction, writing instruction, “Appreciation” characters